

甘みが強く 大玉生産も



県産業技術センターりんご研究所県南果樹部が育成したオウトウの新品種「ジュノハート」。2015年秋から苗木の販売が県内限定で始まり、20年に本格デビューを控える。甘みが強く、4L（横径31ミ以上34ミ未満）サイズの大玉生産が可能。見た目は濃い紅色で、

ハート形という特徴を持つ。見栄えが良く、高級感にあふれていることから贈答用や観光果樹園での活用が期待される。県や関係者は15年産で華々しく市場デビューした県産米「青天の霹靂」に続く、県産農林水産物のトップブランドに育てる考えだ。（齋絢一郎）

オウトウの新品種「ジュノハート」

県南果樹部によると、ジュノハートは本県オリジナル品種のオウトウとしては00年に品種登録された「Jのしずく」以来2例目になるといふ。

1998年に同部（当時・県りんご試験場県南果樹研究センター）が、糖度が高く実が硬い「紅秀峰」に、大玉の特性を持つ「サミット」を交配して育成した。2012年3月に品種登録申請し、翌13年12月16日に品種登録された。名前はローマ神話における「女性の結婚生活を守護する女神」のジュノと、果実がハート形をしていることに由来する。

果実の重さは、国内で最も多く栽培されている「佐藤錦」の7〜

8割を大きく上回る約11割。大きさは3L（横径28ミ以上31ミ未満）が主体だが、4Lの取れる割合も高い。同部の調査データによると、糖度は19・8%と高く、酸度が0・48%と低い。「佐藤錦」は糖度17・7%、酸度0・47%であり、質を持つことから「食べやすい」「離核」の性質を持つことから「食質を持つこと」「食べやすい」「食感」の取得も高い。同部の担当者は「糖度は佐藤錦より総じて高部」といふ。

同部の調査データによると、糖度は19・8%と高く、酸度が0・48%と低い。「佐藤錦」は糖度17・7%、酸度0・47%であり、質を持つこと「食べやすい」「食感」の取得も高い。同部の担当者は「糖度は佐藤錦より総じて高部」といふ。

同部の調査データによると、糖度は19・8%と高く、酸度が0・48%と低い。「佐藤錦」は糖度17・7%、酸度0・47%であり、質を持つこと「食べやすい」「食感」の取得も高い。同部の担当者は「糖度は佐藤錦より総じて高部」といふ。

県産技術センター 20年に本格デビュー



面積は全国で4820ヘクタール。このうち山形県が3140ヘクタールで約65%を占め、本県は305ヘクタールで、北海道（561ヘクタール）と山梨県（352ヘクタール）に次ぐ。

2020年に本格デビューを控えるオウトウの新品種「ジュノハート」（県りんご果樹課提供）

15年産から苗木の販売が始まった。県りんご果樹課によると、15年度の苗木販売実績は550本程度。県は20年までの目標栽培面積として16ヘクタールを掲げる。

産地間競争に打ち勝つためには生産・販売の両面から計画的な取り組みが必要となる。県は15、16年度の2年間を「ブランド化に向けた準備期」と位置付けて活動してきた。

16年1月に生産者、流通団体、種苗業者などで組織し、高品質安定生産技術の確立や栽培技術の普及を担う「普及促進研究会」を発足。同12月に生産者団体、関係農協、市場、弘前市といった関係市町などで構成し、生産・販売対策を協議した。

同課の館田朋彦課長は「ジュノハートを通じて「本県がオウトウの産地であることをPRしたい」と力を込め、「果実版の『青天の霹靂』として売り出した」と20年の本格デビューを見据えた。

平成29年5月5日 陸奥新報 掲載

この画像は、当該ページに限って陸奥新報社が記事利用を許諾したものです。